才能を摘む入試の弊

「何でも出来るのが良い」という考え方が、今の大学入試にも見られる。どこの大学でも、大学で専攻する学問には全く縁がないと思われる学科でも、入試に課している。実に多くの学科にわたって試験をするのである。

だから、専門の分野では抜きん出たすばらしい才能を持った者でも、入試科目に不得手なものが一つあっただけで合格することが出来ず、そのため、あたらその才能を伸ばせないで終ってしまうことがある。まことに惜しいことであり、残念なことではないか。

大阪外語大学で学んだ作家の司馬遼太郎氏の同期生には異才が多いと言う。その理由は、彼らの期に限って入試に数学が課せられなかったためだという意見を私は聞いたことがある。多分に頷ける意見である。もしそうだとするならば（勿論、それが理由のすべてだというのではないが）、外国語を学ぶのに数学がどうしても出来なければならないとは思えないので、入試科目から数学をはずした方がその適格者を集めるのに適していると思う。

大学に入ってしまえば全く必要としない学問を、ただ入学試験のためだけに、いやでいやでたまらない学問を我慢してやる、という仕組みは決して良いものではない。その努力を、自分の一生の仕事に直接関係する学問、好きでたまらない得意な学問にそそぐ方が、どんなに有益かわからないからである。

入試の科目が多くなれば多くなるほど、その試験を通過する人間のタイプは似たものになる。昔の高等師範学校は入試科目が多いことで有名であった。だから、高師出身者には、一見してそれとわかるものがあった。教師の養成機関としてそれが望ましいと考えられていたからであろう。それはそれで良いと思う。ただそれだけだったら困るのだ。

高師と対照的なのが、私の学んだ大東文化学院である。入試科目はただ一つ、漢文だけであった。六年間、ひたすら漢文を専攻するのだから、漢文を読解する力さえ優れていれば良い、という考え方に依っていたからである。そのため、漢文に他より抜きん出た力を持っていさえすれば、他の学科は全く出来なくても入学試験に合格できた。その代り何でも良く出来る秀才でも、漢文の力が少しでも弱いと、落第の憂き目に逢った。

これで良いではないか。いや、この方が良いと私は確信する。専攻する学問に直接必要な力さえ持っていれば良い、という条件だけにすれば、多彩な人間が集まる可能性が高くなる。事実、私の同窓生には、漢文専攻でありながら、軍人もいたし、医者もいた。私の同期生 19 人の中にも、師範学校の現役教授で、受験し合格したので退職して入学した、という者がある。また、作曲を得意とする者もいて、これは結局音楽家としての道に進んだ。漢文は極めて得意だが、それしか出来ないという者もいれば、多能の者もいた。

「君子は多能ではない」と孔子は言ったが、それは多能である必要がないという意味であって、多能であってはならぬということではない。しかし、孔子が多能を尊ばなかったことだけは間違いない。